

大興安嶺兩側地方の經濟地理的視察

寺 田 貞 次

一、序 説

二、視察地狀況——(イ)濱洲線沿線地方——(ロ)平齊線沿線地方——(ハ)海拉爾地方——(ニ)視察地概観

三、北滿地方の經濟資源——(イ)農産資源——(ロ)畜産資源——(ハ)林産資源——(ニ)鑛産資源——(ホ)水産資源——

四、經濟資源利用の現狀況——(イ)農耕業——(ロ)牧畜業——(ハ)商工業及鑛業

五、經濟資源利用の將來

六、結 語

一 序 説

滿支方面の研究は現今各方面に於て行はれ、其の調査報告は汗牛充棟である。従て極く局部的な報告の如き之を發表の要はないのであるが、然したとへ夫は極く局限された地域であり概括的な視察であるにせよ、踏査した處は最確實であり、又其の觀察も人に依り異なるものであるから、決して棄つべきものでない、この意味に於て自分の視察は滿洲國の一小部分に過ぎないとは云へ、愚感を述ぶることは必ずしも無益の業ではないと信じ、先年茶話會席上でも話した次第であるが、今又この誌に掲載の榮を得たので、稍時機を失した感はあるが事實には甚

しき變化はないと思ふので、再愚感を述ぶることとする。

二 視 察 地 状 況

自分の滿洲國視察拜命は昭和十二年の事で、其の八月十三日に出立、同廿五日に歸任したのであり、僅々二週日に過ぎない、短時日の視察であるため、先年一度視察した南滿地方を割愛、北滿の視察に局限し、北滿中の極く一小部分を視察する事にとどめた、即ち豫て踏査を希望して居た大興安嶺を中心とし、其の兩側の地を視察することにしたのである、政治的區劃で申すならば、龍江省、興安東省、興安北省並に興安南省の北部の一角になる。

自分は此地方を理解するため、濱洲線により哈爾濱を経て海拉爾まで行き、引きかへして、齊々哈爾より平齊線に依り四平街に出たのである、従て自分の視察と申すのは主としてこの沿線に過ぎない。然し沿線の風物はこの地方の地理的性質をあらはし北滿の自然を理解し得るものと信ずるので、左に車中よりの沿線風光を簡単に記載する。

然し其の前に理解し置くべき事は、此地方も滿洲大盆地の一部であるために、地形は南滿の地形と異りはない點である、畢竟滿洲の盆地は一大洪積原で、四圍の山脈から流出した微細な坭土が水の作用によつて此低地一帯に堆積し、退水と共に平坦な坭土地としてあらはれ、其處に再水路を生じ、所謂嫩江系を生じ、之に依つて流域地がぎざまれた處である。従て滿洲南部に於けると同様、此地方は一帯に縹渺たる平坦原をなし、其處に低く嫩

江の本支流が葉脈の如く流れてゐる状態であり、興安嶺山脈が此地方の西端を東北西南の方向に走つて土地を東西兩部に分つてゐるのである。

この興安嶺山脈は地質上最古い地層に屬してゐるもので、多年の星霜を経て、全く削られ緩斜面の地形を形成したのであるから、此邊の地形を觀るとどこまでも渺々として平坦で、全體としては大なる緩斜面地をなし、一部としては平坦地をなし、遙に見ゆる山脈も亦同様緩斜面をなし、樹木がないために渺々たる曠野を呈してゐるのである。全體の地形はどこに至つても右のやうであるが、扱て其の地理的性質は如何であるか、先づ濱洲線により視察する。

(イ) 濱洲線沿線地方

朝の八時十分哈爾濱を發す、直ぐ松花江を渡る、河岸の柳楊綠濃かに、牧馬の朝霧に尾をふりつゝ歩める爽快である。渡れば漠々たる緩斜面の平野、稍粗ながら耕地は美はしく開けてゐる、極りなき畝は緩斜面を越して連續してゐる、廟台子驛を通過す、耕地は漸次牧場地にかはる、牧童の朝霧を踏んで飼草を刈れる豚の子と戯れるなど趣がある。九時對青山驛に着く、廣漠たる緩丘陵中の盆地、一帯の牧場をなし、丘陵は耕作され青々として、恰もイングランドの如き風光を呈してゐる、粟、大豆の類が栽培されてゐるのである。濱北線の分岐點だけに活動の色を呈してゐる、牧場は今や牧草刈入時と見へ、牧馬に乗じて歩める、枯草を曳く數頭の牧馬など興味ある景色である。牧草は渦高く積まれ、山の如き感がした。

次で姜家 (Chang Chia) を通る、同じく牧草部落、附近は廣く耕され、耕畝の遙に續ける内地には見られぬ光景であり、此處では甜菜^{ビーツ}が栽培されてゐた。十時過滿溝に着く、此邊も尙耕作地開け、驛附近にはアンペラにて蔽へる大規模な倉庫風物が數多く眼につく、附近出廻大豆の假保存庫であると、乗客の一人は教えてくれた、この邊では甜菜も産し又大豆も相當の產出のあることが知れる。

之より一帯の放牧地に入り、土質の白色を呈してゐるのが注意を引く、はてしなき放牧地かなの感に打たれる、刈取をなす住民も多く見受られた、然し尙所々耕作地も交り、大豆、粟など眼につく、枯草を角形にプレスし、貨車に積み込める、緬羊を追ふ滿人の姿など眼新しく、かくて耕地は漸く少くなり、今や茫漠たる牧草地となる。一帯に平坦で、一本の樹木もなく、單なる牧草原實に曠漠たる景色である、退屈な牧草地帯の通過かなと句感を生ずる位である。十一時廿分宋站に着く、相變らずの牧草原附近には牧草の大堆積があり、緬羊の群集せる面白く眺めた、尙こゝで注意を引いたのは住宅である、何れも粘土製で平坦なる屋根、城砦式に造れる恰もアラビヤ邊にでも行つた感がする。十二時には安達 (Am-ta) に着く、飛び交ふ燕が注意を引く、從來の平原地に比し稍性質の變化を物語るものであらう、附近には多少耕地もあり、粟大豆が眼についたが、之よりは一望千里の葦原地と化し、所々沼澤が注意を引くのである。花草など其の間に交り、恰も北海道の泥炭地乃至はカムチャツカの原野を想像せしむる、然し又變じて立派な牧草地を呈する處もあるが、總じて樹林もなく、人家もなく、唯曠漠たる草原中花草の色彩益々濃かなるに注意を引くのみである。桔梗、女郎花、吾亦紅、薄等眼につく、又不思議

議にも池畔は一帯に白色に見えるのが注意を引く。

一時半薩爾圖に着く、牧草原中の土部落、土壁を外郭とし、密集居住する有様、原始人民の防禦生活を思ひ出し、物淋しき感に打たれる、然し驛は珍らしくも花草で飾られ、白樺高く枝を交へ、綺麗な小部落であるの感で起すと共に、栽培せば植物の生育必すしも不可能に非ることを覚えしめ、又附近の牧場には乳牛を發見し、沼澤に富める地方とて此種牧場に適するものかと覺らしめた。次で喇嘛甸子に着く、相變らず牧草中の一驛で、殆ど民家も見えず、坭土にて築ける部落の外郭を柳楊下に眺め得るのみ、沼澤地は尙各所に見らる。

午後三時小萬子に着く、相變らず牧野中の小部落ではあるが、柳楊の下自動車の走れるを發見、旅愁を慰めた、豚は各家に飼養され、之を追ふ婦人子供等趣を添へる。此邊より少しづつ耕作地を眺め得るに至り、草原中に廢居の址も見られ向日葵の美はしく咲ける、高粱畑、大豆畑、蕎麥畑の綺麗につくられたる愉快である。然し此風光は暫くにして、再牧草原となり、四時頃煙筒屯に着く、こゝも尙沼澤地、蓴菜の綺麗に咲ける、鳩の群れる、牧馬の悠々たる趣があつた。四時四十五分昂々溪(Ang-Ang-hsi)に着く、この附近には耕地も相當に開け居るものと見え、驛内には西瓜店が開かれ、「構内に西瓜の市や昂々溪」の句を發せしむ、此處にて乗替へ、五時發、昭和六年十一月馬占山軍に關する戰跡たる榆樹屯(Yu-shu-tun)を經、五時五十分齊々哈爾に着く、哈爾濱より此處まで約九時間を要した。齊々哈爾は地方唯一の大都市、舊市街も規模大きく、帝政露西亞時代より滿鐵時代につき、新市街の建設も着々進捗、驛の如きも規模廣大内地にては見られぬ立派さである。然し附近は尙

漠然たる荒野、大都市の事とて多少の耕地を見るが、尙一帯の草原たるを免れず、南滿地方に見る農耕地に比すべくもない。(齊々哈爾案内)

要するに、哈爾濱より齊々哈爾に至る汽車九時間程の間は所々小部落を見ると雖、何れも眞の寒村で、都市として觀るべきものは一つもなく、部落附近には多少の耕地は開けてゐるが、主に牧業地であり、其の他は見渡す限りの草原をなし、樹木すらもなく、僅に小部落に於ける數本の柳楊、白樺の類を見るに過ぎない、草原地には所により沼澤地を混する處があり、白色土壤の擴がれる處のある有様である。

(ロ) 平齊線沿線地方

次に齊々哈爾より歸途通過した平齊線沿線を觀察する。此處は平く云はゞ興安嶺山脉に沿へる東南の斜面平地と申すことが出来る、朝九時に出立、昂々溪で乗替へる、相變らずの草原地、衙門屯、三間房邊では多少の耕地を見、滿洲風の大鎌を擔けて往來する農夫など珍らし、乗客の一人は懇切に説明してくれた、「大鎌をかつぎて行くや大花野」九時大興驛に着く、小部落附近は皇軍の戰跡、我が忠勇將士の墓標八ヶ所も並んでゐるのにはぞろ感慨に堪へなかつた。十時には江橋に着き、やがて嫩江を渡る、水清く汽船の旗風に颯へる壯觀である。却々の大河であるが防岸工事とてもなく、自然のまゝに放任され、兩岸は全くの斷崖をなし、臺地形に發達せる河岸の緩丘陵地よりは、古象化石を發見したと聞き興味を引く。民屋は濱洲線地方と同様土壁造平屋根式であるが前地方に比すると清潔の感に打たれた。十時過泰來に着く、草原中の一部落、相當の人家が密集して見える、卒業生

松本長市君の就職地、幸にも出迎へられ、次驛まで同乗されたので、經濟事情を聞く事が出來た、此附近は多少とも耕地を見、大豆、小麥、高粱の産を有すと聞けど、まだ／＼草原たるを免れてゐない。十二時過白城子(Bocheng-tzu)に着く、此處は蒙古に通する白溫線の分岐點で、稍賑つて居り、民屋は矢張り此地方一般に見る土壁造であるが、綺麗であり、邦人の滞在も少なぐぬものと見へ、赤瓦屋根の住宅並に神社も眼についた、然し四圍は尙曠漠たる草原、餘りの退屈さに睡氣を催す許である。二時頃開通に着く。渡邊上等兵戰死之地と墨痕鮮かな墓標に眼を覺ます感慨。三時太平川に着く、始めて煉瓦造の家屋を見、從來の土壁部落と異り、稍都會らしき感に打たれた。五時十五分鄭家屯に着く、附近には石器時代の遺跡として知らるゝ鄂博山の小丘陵横はり、稍無趣味を破つて居り、市街も相當であり、白樺の樹林も各所に見られ、耕地も流石に開け、南滿に近きの感を抱かしめるが、尙耕法は極く粗放的であり未開の状態を脱してゐない。遼河を渡り、やがて四平街に着く、七時頃であつた。齊々哈爾より此處まで約十時間、哈濱、齊々哈爾間と略同一距離と思はれ、兩者共に大草原地なれど、前者に比すればすべてが綺麗で、何となく發達せるの印象を與えた。

(一) 海 拉 爾 地 方

次に齊々哈爾より與安嶺を経て、海拉爾に至る濱洲線沿線を観る、夜の八時半に出立したので、與安嶺は夜中に通過することになり、沿線の風物は不明である。二時五十分頃札蘭屯につき、朝の六時頃眼を覺ますと、汽車は珍らしく谷間を縫ふて下つてゐる。昨日の平原とは異り流石に山は迫つてゐるが、相變らずの緩丘陵で樹木と

てはなく全くの草山、恰も我が若草山の如く緑濃かに谷間に白霧のたなびける實に美しい、唯一筋の細道を辿る土人の一人二人「唯一本花野を通る土人道」博克圖(Poka tu)を通る、木材町と見え、丸太の驛内に横はれる、流石は山地、然し何處から産するものかと不審に思はるゝ程である。故荒木大尉記念碑を涙ながらに拜すると、鐵路は大迂曲をなす、乗客も當時を追懷して互に談り合ふ、愈々此處で興安嶺を越すのであると。流石の草原も此處のみは樹林を見る、白樺、落葉松の類らしい、然しこゝとても京圖線沿線に觀るが如き密林に比すべくもなく、盛夏の候とは云へ尙冬枯の氣分にて寧物さみしい、隧道を通る。一九一五年の開通、堅固なる城砦的に築かれてある。八時頃興安驛に着く、之より再緩丘陵性の草原地となり、九時半には免渡河に着く。稍大きな町、家屋は從來と異り、山間地だけに木造、恰も北海道に見る屯田兵村の感がある。附近の山地は全く無樹の草山であるが、乗客の説に依れば沿線は匪賊防備のため伐採したもので、現今一本の樹木すら發見しないが、沿線を隔るに従ひ密林を有してゐるとの事であり、白樺の木材の沿線に切り出されてゐるのを見受けた。この邊からぼつ／＼天幕生活者を發見する、蒙古人の生活は始めての事とて珍らしく、愈々蒙古に踏み込んだ感に打たれ愉快であつた。前に見た大鎌をかついで通る土人の數も多く見られ、草原谷には各所牛が放牧され趣を添える。十時十五分には牙克石に、十一時四十分には博克に着、十二時十五分海拉爾に着した。卒業生石井君の案内で市街を視察したのであるが、町は帝政露西亞時代のまゝで、露西亞式木造建築物が軒を並べて居り、相當の町ではあるが淋しい、海拉爾河の沿岸で附近には緩丘陵も起伏してゐるが、何れも樹林なく草山を呈してゐる、唯市の北方に

横はる丘陵上に一叢の松林が眼につく、附近には見られぬ珍現象、案内の石井君も之には特に注意し説明してくれた。蓋此地方森林の可能性を物語るものと有益に眺めた。

(二) 視察地概観

以上通過地の觀察によると、哈爾濱以西の地は興安嶺の兩側共に耕地は一般に少く、牧場地をなすか、然もなくば全部草原地であると申してよい、自分は教室に於てよくステツプとが草原とか云ふ事を話してゐたのであるが、此處に來て始めて字義通りの草原を觀少なからず驚き、最初は人爲的に牧草でも播種したものでなからうかと考へたのであるが、決して人爲的ではない、唯優良なる草を得る目的で、秋季枯草を焚く、俗に野火ノビと稱し壯觀で、内地では到底見られぬ現象を呈するのみで、全く自然の草原であるとのことである。其の原因は矢張り氣候關係であろうが實に不思議な現象である。夫は兎も角かゝる廣漠たる平原が全部綠草で充たされてゐる事はいかにも不思議であるが、然しこれは決して此處だけの不思議ではない、すべて未開の地はかゝるもので、夫が氣候の關係で、樹林の密生する處と、この地方の如く樹木なく雜草原をなす處とを生ずるわけであると考へれば別に不思議はないわけである、夫よりも何故に之を利用しないのであろうかと云ふ事の方が一層不思議に思はれるのである。

然らば此草原は果して利用が出来ないのであろうか、勿論氣候が冷氣に失するため、作物の生育がよくないとか、興安嶺の北側では乾燥に失して是亦植物の生育に適しないとか云ふ理由もあるのであるが、今通過した地方

の如きは草原であり、雜草の成育は寧旺盛であるから、他の作物のみが生育しない理由はなかりと考へられ、氣候は兎も角土壤に至つては植物の生育に不適であるとは考へられない。論より證據で、沿線の部落附近には多少耕作地が開かれて居り、作物も相當生育し、花も開き實をも結んでゐるのである。平齊線の泰來で、松本長市君が此附近は未開ではあるが耕作さへすれば收穫はあげ得るのである。現に泰來では資金を融通し農業をやらせてゐるのであるが、一人の耕作地を六町歩とし、地主の方で小作人の生計費を負擔し、勞力だけを供給せしめ、收穫は之を皆に分與する方法をとつてゐると云ふてゐたのを吟味すると、矢張り土地の作物に不適と云はんよりも寧ろ勞力の不足を物語つてゐる事が知れるのである。尙此地方は大部分が所謂蒙古地帯に屬し、元來原始的な遊牧地帯であつたのであるが、近時漢民族の北進につれ漸く耕作地になりつゝある處で、僅々百年乃至百五十年來の事であり、日尙淺いため、耕地は未だ少く、蒙古人の土着者或は遊牧者が尙居住してゐるのであるから、從て有畜農業地帯は未だ極く一部分で、大部分は原始的な遊牧地をなしてゐるのであると云はれてゐるが、（齊々哈爾鐵
路局管内ニ
於ケル産業ノ現
在及將來頁六）此等も當然農耕地として利用し得る土地なる事を物語るものである。果して然りとせば、此の土地資源が現今の處未だ遊ばせてあるものと申すことが出来る事となり、之が利用を講ずる要があると云ふ事に歸着するわけである。

然しかゝる廣漠たる土地資源の存してゐると云ふ事は將來人間の發展上希望のあると云ふ事であるから、そう急ぐ必要は決してない、滿洲に於ては耕作適地は南方から次第に開發せられ、現に我が移住地としては牡丹江方

面から松花江下流地方等まで行はれてゐると聞くが、將來は本地方も開發さるべき運命にある處とたのもしく感じた。

三 北滿地方の經濟資源

(イ) 農 産 資 源

然らば本地方は眞に農耕地として利用し得べき土地であろうか、之を文獻に徴するに、普通作物の耕作可能雨量は二〇吋(五〇〇耗)で、此限界線は滿洲に於ては南部は熱河省の凌源から東北に進み、鄭家屯の西方、扶餘の南東を過ぎ、哈爾濱の北西を経て、愛琿の方に進んでゐるのである。從て本地域内は雨量少く降水量は哈爾濱四二八耗・齊々哈爾二〇一耗、海拉爾二八四耗で、何れも耕作可能量に達してゐない(アジャの概説と) 故に此地

(アジャの概説と)
滿洲蒙古頁一五〇)

方は耕作不可能と云ふことになるわけである。然し降水量は少くとも又之に適する作物はないでもなかうと考へられるのであり、現に滿洲は氣候が一般に大陸的であり寒暑の差が大であり、日照時間多く、空氣乾燥蒸發量大なるに反し降水量が少い爲に、水田の如きは不可能であるが、大豆、粟、小麥、玉蜀黍、高粱の如き、比較的乾燥に耐へ得る作物ならば栽培し得ると云ひ(龍江省産業要覽頁四)、又龍江省は滿洲中北緯四四・一九度から五一・〇八度に亘つて居り、其位置に於て恰も北米加奈陀南部に相當してゐる、從て龍江省南部は大豆・北部は小麥の栽培に適するはずであると云ふて居り(龍江省産業要覽頁二)、更に降水量を觀ると、滿洲の降水量は一般に支那本土の二分の一乃至三分の一で、龍江省の如き八年平均約五一〇耗で多い方ではない、無霜期間の如きも滿洲では奉天では一五〇

日、營口では二〇〇日なるに反し、哈爾濱では一五〇日、龍江省一五三日、昂々溪一五〇日内外、札蘭屯、滿洲里一〇日内外を示し、北部に至るに従つて其の期間は減少してゐる、従て南滿地方では大豆、高粱、粟等の作物以外に棉花、果樹の如き霜害を受け易い作物も栽培し得るに反し、北滿では農作物は大に局限されるわけであり、結局麥類の如き霜に對する抗力の強い作物か或は生育期間の比較的短い作物なれば栽培し得ることになる（龍江省覽頁三）と申して居り、何れも全然耕作不可能とは申して居ないのである。否寧比較的乾燥に抗し得る作物ならば可能であると見てゐるのである。然し收量に至つては誰が考へても多量であるとは考へられない、單位面積當の收益を觀ると、日本内地では一畝より平均七百圓の收穫あるに反し、滿洲では百圓であり、内地では一町歩を以て農民の生活水準とするが滿洲では約七町歩を必要とすると云ふてゐる（龍江省產業要覽頁四）然れば此地方の如き極く理想的な好農耕地と申す事は勿論不可能ではあるが、然し農耕地として利用し得る土地であると云ふことは申しても差支がないと思はれる。

唯注意すべきは之を利用すべき人間の關係である、此地方の人口を觀るに、平齊線農產地帯の面積は四、四三八萬平方料、齊北線地帯の面積六、七〇八萬平方料で、人口は前者は一、八九萬人、後者は一、〇八萬人で、人口密度は一陌當り平齊線〇、四二七人、齊北線〇、一六一人となり、密度の稀薄なるを覺らしめる。（齊々哈爾鐵路現在及將來）然らばこの地方は人間の居住は不可能であらうか、現今の住民に就て觀察するに、この地方は元來蒙章族^{シグアイ}の居住地であり、原始的な農畜業を營んでゐたのであるが、當時大興安嶺より嫩江以西には蒙古族、松

花江より長白山脉に至る地域には通古斯族^{ツングース}が居住して居り、室韋族は其の影響を受けて發展し得ず、近時には僅に齊々哈爾を中心とした嫩江沿岸に居住するのみであつたが、露西亞の西比利亞經營に當り又其の壓迫を蒙り、遂に清朝に屬するに至つた、清朝では邊境防備の必要上此地を屯田兵的機構の旗軍に編入し、此等旗人保護の爲、滿洲内に於ける天然資源の開拓を禁じ、又漢人の移民をも禁止した、然るに旗人の弊風として農耕に親しまず、遂に一九〇四年(光緒三十年)には一般土地の貸下、賣買並に移民の土地所有をも認可するに至り、之より漢族の移民増加し、現今の開發を見るに至つたのである。現今尙人口稀薄ではあるが之は漢族移住許可後日尙淺きが爲であると申すから(齊々哈爾鐵路局管内)^{齊々哈爾鐵路局管内}この地方の如き決して人間居住に不適と云ふ事はないのである事が知れる、然れば勞働力が入り込み、人間居住に適する保溫の設備が完備し、灌漑設備も出來たならば農耕地として相當の收穫を擧げ得るものと考へられ、松本氏の耕作さへすれば收穫をあげ得るが勞力が不足で出來ないと云はれたのは當を得ることゝ考へた。

それで沿線の可耕地積を計算したものと見ると、平齊線七〇%、齊北線九六%であつた、其の中既耕地は平齊線三四%、齊北線一五%となつて居るのであるから(齊々哈爾鐵路局管内)^{齊々哈爾鐵路局管内}將來滿洲の産業開發計畫の進歩して移民政策が徹底し、蒙古人の土着等が出来るにつれ、將來大に見るべきものがあると思はれる。何分にも地勢氣溫の關係で耕作物は自ら制限を受くる地方が多いのであるから、純農業地とならしむことは困難な業で、大部分は畜産を主體とする農牧業地或は純牧業地として利用する方が得策であろうと考へる。(龍江省産業要覽)

以上は興安嶺以東の話であるが、以西の地、即ち海拉爾を中心とした地方は氣候も一層酷烈であり勞働力も一層少くなる爲に、例へ夏季の間多少の耕作をなし得るにせよ、嶺東地方の如き望みは考へ難い、海拉爾の鐵路總局洗毛廠の藤井巍氏に依れば先年某氏が海拉爾川支流のオイナ川畔で四百町歩許の農園を經營したが、不幸失敗に歸したとのことであつた、此等は一は經營法の不備にもよることであるが、又氣候等地理的關係にもよることであろうと考へられ、之より少し以西になると愈沙漠の性質を發揮し耕作は全然不可能となるのである。故に現今では食料品即ち小麥の類は之を輸入に仰いでゐるわけであるから、此地方の如きは從來通り寧ろ牧業地として發達を計つた方が得策であろうと考へる。

然らば本地方の開發は寧將來に屬し、夫も前途遼遠の感を抱かしむるものであるが、かゝる將來性の土地の廣漠たることは滿洲經營上から觀れば其の有望を示すものであるから、自分共は現今尙未開發であるからと申して決して急ぐ必要はないと考へてゐる、餘り早く開發されることは如何にも結構には相違ないが、其の反面には又夫れだけ早く人口の飽和を來し將來移民地としての有望さを減するわけであるから、自分は將來性あるこの土地の廣漠さを觀察し大に祝福する次第である。

(八) 畜 産 資 源

然らば本地方は農耕以外に經濟的資源はないであろうか、次に觀察すべき問題である。先づ第一に考ふべきは牧畜であろう。牧畜は農耕に比し最適當である爲に、從來相當に行はれて來た、沿線各地に於て豚・羊・牛など

の飼養を目撃したのであるが、然しこの方は農耕とは反對に興安嶺の西側の方が一層有望視されるわけである、蓋興安嶺の西側は氣候こそ冷氣であるが乾燥で、蒙古人の居住地をなし、古來遊牧に利用し多數の群畜を飼養して來た爲で、この方は嶺東には見ることの出来ない盛況である、家畜には種類は多いが、就中馬・羊は最之に適し、從て酪業は主要な畜産工業をなしてゐる、
(齊々哈爾鐵路局管内
 産業ノ現在及將來)

この牧業に關する利用としては第一牧草資源を擧げねばならぬ。この地方は至る處草原であるから之を巧に利用する時、牧草の大資源地たることは申すまでもない、現に沿線各所に於て枯草の堆積を見たのは之を物語るもので、現今最多く利用されてゐるのはルーサンと稱する牧草(萩の如き植物にて
 綠肥・飼料とす)で、此種子を配付し培養を獎勵してゐる。
(哈爾濱博物館技師齊々哈爾
 鐵路局管内産業ノ現在及將來)

家畜では馬・牛・羊が擧げられる、馬は俗に蒙古馬と稱するもので、體驅は餘り大でないが、農耕用として地方的に使用されてゐる、牛も蒙古牛と稱するもので、露西亞時代に於ては之が雜種をつくり飼養したものである、然し體質は良好でない、殘留露人は乳を利用バターを製し自家用に供してゐる程度である。豚も飼養されるが在來種は肉の量少いのでパークシヤ種(黒家)にかへつゝあると云ふ事であり、毛は米國で絨氈原料として使用されてゐる。羊も飼養されるが之れも在來種は毛が粗惡で洋服地に適しない、又一頭よりの毛量も多くないので、緬羊種に改良しつゝある。海拉爾鐵路洗毛廠の藤井氏に依れば、現今蒙古では約二百萬頭の緬羊を飼養してゐるが、牧草が良質でない爲に毛の質は粗惡で、混毛用として利用されてはゐるものゝ、品質から申せば世界中

でも最劣等品と申すべきである、然し蒙古人にとつては之が唯一の産業であるから、一家族に五百頭を單位として飼養し、水草を追て移動する、一日に水より三里程の間を移動する五里も隔れば結果がよくないと云はれてゐる、この移動の道筋は年々畧一定、舊八月一日には各移動者は甘珠爾廟カンゾールと稱するラマ廟に集る習慣になつてゐる、廟會と稱し、約二萬人が集り、同時に市を開き、併せて家運の長久、無事息災を祈願し、廟を巡り、非常の賑を呈するのである。(藤井洗毛 廠長談)

又此地方は各所沼澤に富んでゐるので水禽が豊富である、鶉ツラギ、雉キジ、山七面鳥など種類に富み、食用に供し得るもの少からず、雉の如きは三十萬羽の收穫があり、殊に英人によりて需要せられ、クリスマス用として多く使用される、然し濫獲に陥る弊があるので禁獵地を制定する計畫もあると云ふ(藤井氏談)かゝる有様で興安嶺の西側でも牧畜は勿論、農耕ですら奨励の餘地があるのであるから、まして山脉以東の地に於ては將來大に開拓、之を利用するの時期の來るべき理と考へる。

(ハ) 林 産 資 源

然らばこの農牧以外には特殊の資源はないであらうか、次は森林を観察する要がある。

沿線に至る處草原で森林を見ない、興安嶺と雖、鐵道沿線は殆ど全部伐採され綺麗な草丘をなし、僅に隧道附近に於て稍森林らしき感到に打たれたのみである。然し此地方は樹木が全然成育しないと云ふのではないらしい、現に海拉爾市の北に横はる丘陵上には立派な松林が一ヶ所ある、日本での鎮守の森の如き形を呈してゐる、此邊

では珍らしい現象だと案内の石井君は談てゐたが、之れを觀ても樹木は培養さへすれば成育し得ることは事實であり、現に沿線以外の興安嶺には森林があり、興安東省並に北省には六十億石の蓄積量があると見積られて居り、又九十億石内外とも推定されて居る（滿洲と日本）位であるが、交通不便のため利用に適しないのである、然し滿洲に於ける木材の需要は一ヶ年四百萬石と云ふのであり、今後開發と共に益需要を増すことは明であるにも拘はらず、現今國內の出材は一ヶ年三百萬石内外に過ぎないので、年々多量を輸入に仰いでゐる有様であるから、將來本山脈の利用は最も必要なこととなるわけであると云はれてゐる。（齊々哈爾鐵路局管内）
（產業ノ現在及將來）

（二）、鑛 産 資 源

次に鑛産資源を觀るに、沿線通過の際眼についたのは札蘭屯（ジャランチュン）のラヂウム温泉である、ラヂウムは放射性元素でウラニウムと花崗岩中酸化物として存するものである。世界では白領コンゴ・北米合衆國・チエツコ・英吉利領ナタールなどが主産地であるが本地方に於てこの産のあることは珍らしいことである。又海拉爾附近には石灰の産がある。札賚諾爾（ジャライノール）を主とし、其の他嫩江縣・龍鎮縣方面にも散在してゐると聞く（齊々哈爾鐵路局管内）、就中札賚諾爾のは札賚諾爾炭礦と稱し、現に北滿鐵道で經營されてゐる、丁度國境に當る滿洲里驛の西北四料の處に位し、露天掘で採掘されて居り、甘米の厚層を有し、埋炭量は三億萬噸と見積られて居り（アジャの概説と滿洲蒙古頁二一六）、年四・五萬噸を採掘して居る、然し炭質は褐炭に屬するもので、燃燒不完全、且風化し易く貯炭にたへない缺點がある、然し此附近では是以外に石炭の産がないのであるから、この邊一般に使用せられ、殊に本地方には樹林なく

薪材も乏しいのであるから需要大である。この他石油も海拉爾の東南四百支里なる興安嶺の谷間に埋藏されてゐると露人ハフモン氏の報告に出てゐると云ひ、又マグネサイト(菱苦土鑛)も博克圖附近より産し、七萬噸の産額を有し、世界産額七十萬噸中の一〇%を出してゐるとも云はれて居り、砂金の如きも呼倫貝爾には其の産を有すと聞く(奉天鐵道總局(警務局)かく此地域には鑛産も各種之を見るのであるが現今の處未だ著しい資源は發見されてゐない。

唯本地方の鑛産資源上見逃す事の出来ないのは天然曹達である、鐵道沿線草原中灰白色土壤地を日撃したのは蓋天然曹達層であつたので、土壤中に溶解されてゐる曹達が、雨期から乾期に移る頃、結晶析出し、同時に風化し、白色粉末状となり、地上では薄霜の如くなり、湖沼では結氷面と被覆する爲である、かゝる風光は日本内地では見られぬ現象、本地方から蒙古・新疆等乾燥地帯の特徴である、本地方に於ては天然曹達の露出は到る處多少其之を見ることが出来るのであるが、殊に採集し得る程度に露出してゐるのは左の地方であると稱せられる。

(龍江省産業要覽頁三五
アジャの概説と滿洲蒙古頁二二七)

- 一、齊々哈爾—安達間、濱洲線沿線一帯(小蒿子驛南方二〇—三〇軒、大連科城鍋・俄克城鍋)
- 二、齊々哈爾—洮南間、洮齊線沿線一帯(景星縣城南方三〇軒城泡子、洮安(白城子)驛附近)
- 三、洮南—四平街間、四洮線沿線一帯(洮南東南方九五軒、ダブスノール・鄭家屯西北方五〇軒玻璃山)
- 四、海拉爾—滿洲里間、濱洲線一帯

海拉爾附近では札賚諾爾邊の産がよく知られ、結水期に於て、水の表面並に裏面に附着するのを採取するのである、又海拉爾市の南方二百軒トスシノホルと云ふ處にも曹達湖があり、一九〇一年頃より採取年額二千五百觔を産出し、又西方ハラフデルトウ湖の南方八十六軒の處にても採取されてゐる（洗廠毛長。採取法は尙小規模であるが、晩近曹達工業の發展に伴ひ重要な工業資源と云はねばならぬ。

（ホ） 水 産 資 源

次に觀るべきは水産である、本地方には河川多く湖沼も豊富であり、河川は重に興安嶺に發源し、水量も多く魚類に富である、然し往時住民（蒙古人）は宗教上漁獲を禁忌する習慣があつたので、漁業は行はれなかつたのであるが、露西亞人の侵入と共に之に注意し、呼蘭湖の水系に於て漁業を始め、次で漢族移住の増加と共に嫩江に於ても漁業は發達するに至つたのである。從て漁業として知られるやうになつたのは最近の事で、實に最近三十年來のことと考へてゐる。（龍江省産業要覽（康徳三年十月）本地方の魚類は鯉を始め何れも六つかしい名稱のもので、鯽魚・草根

魚・青根魚・胖頭魚・白魚・紅尾把稍魚・蓮花魚・發綠魚（法洛魚）など多數あげられてゐる。齊々哈爾附近では葫蘆頭・船套子・三家子・拉哈・江橋などの魚場が知られ、大體三・四・五月に亘る解水期に於て漁獲され、日本内地に比し原始的な方法で漁獲すると云はれてゐるのであるが、住民の増加と共に重要な産業となるべきものであるかと將來農家の副業資源として發展の策を講ずることが必要である。（アジャの概説と滿洲・蒙古頁三四五）

（龍江省産業要覽頁二四、康徳三年）

以上は北滿即ち興安嶺の兩側に於ける自然界の狀況で、其の天然資源を觀察したものである、要するに本地方

は一般に地形雄大な緩斜面地で、部分的に見れば平坦であり、諸所に河川あり、流水比較的豊富であるから、氣温は稍低きの缺點はあるが、夏季植物の生育に不適でない、且氣候關係が兩側によつて異り、西側即ち海拉爾側は齊々哈爾側に比してはげしいから、農耕よりも牧業地として勝れてゐる感がある、現今の處は尙耕地としての利用は進んで居らず、牧場としての利用は農耕に比すれば進んでゐるやうに見受けられるが、夫とても未だ充分とは見られない、森林は全部草原に化して居り、平地には樹木は少しもない、唯山脈地に於て幾分森林を存してゐると聞が、利用は未だ行はれてゐないし、夫以上積極的の利用はなされてゐない。念のため本地方の性質を今一度概括的に見れば次の如のやうになる。

(齊々哈鐵路局管内
産業ノ現在及將來)

一、平齊線地方は鄭家屯を中心とし南北に分ち得、以南は地味も肥え農耕に適し、以北はアルカリ性土壤で農耕不適にして牧畜兼業の地、殊に緬羊・牛・馬の増殖に適す。

一、齊北線・訥河線地方は一般に地味肥沃、畜農兼業地として有望。

一、濱州線地方は山岳地を含み、農耕適地少きも、概して礮子山^{テンソウ}以東は地味肥え、農牧兼業地、以西は純牧業地と稱し得、特に馬・羊・酪業に適す。

四 經濟資源利用の現況

(イ) 農

耕

然らば本地方は現今如何に利用されてゐるか、先づ農耕方面から觀察する。

龍江省の地は其の面積一六・八八九千响で(全滿洲の約十分の一)、其の中、不可耕地は五・一八五千响(三〇・七%)、可耕未墾地八・九八三千响(五三・一%)、既墾地は二・六八八千响で全面積の一五・九%に當り、更に省内の人口に比すると一人當の既墾地は一・二五响で、興安四省を除き、全國十省中では首位に當つてゐる。(龍江省産業要覽頁八)作物は滿洲の他の地方と同様、大豆・粟・高粱・玉蜀黍・小麥等で、左表の如き割合で栽培されてゐる。

大	豆	四五〇、一四〇响	二五・〇%
粟		三八七、七四六响	二一・六%
高	粱	二四一、八二一响	一三・五%
玉	蜀黍	二一四、五三一响	一一・九%
小	麥	二〇三、三九二响	一一・三%

尙之に次で、作付面積の大きいのは、大麥(三・三%)・黍子(三・二%)・蕎麥(二・七%)・稗子(一・三%)・小豆(〇・八九%)などで、特用作物としては荏・大麻・青麻・芝麻・葉煙草も栽培されてゐる、而本省の地は將來利用すべき可耕未墾地は總面積の五割三分に當つて居り、尙この既墾地に對する人口密度も未だ粗であるから、この兩方から觀て、本地方の農業は將來大に有望であることを察することが出来る。(龍江省の産業要覽頁八)

次に平齊線地方を觀るに、其の地積は四、四三八千陌で、就中不可耕地は一、三三二千陌、(三二%)可耕未墾

地は二〇五二千陌(四六%)、既耕地は一、〇六二千陌で、總面積に對して廿四%に當つて居り、作物は高粱・粟・大豆・玉蜀黍、雜穀などで其の作付面積並に生産高は左の通りである。

(齊々哈爾鐵路局管内產
業の現在及將來頁四〇)

		作 付 面 積	生 産 高
大	豆	一七八、七二八陌	一七九、八一九担
高	粱	二八一、八六三	三三七、四五〇
粟		二三三、〇九〇	三四六、二七四
玉	蜀 黍	一一五、二三〇	一四五、二四三
雜	穀	一〇五、七一一	九〇、七八八
小	麥	二、三四五	四、五七二
豆	類	五〇、八七一	三八、八二二
陸	稻	七四二	五三〇
計		一、〇〇三、八七三	一、〇六八、〇六五

而可耕未耕地は總面積の四割六分に當つて居るから龍江省地方と同様、將來有望な農耕地たるを失はない。

次に興安北省並に東省地方を觀るに、海拉爾洗毛廠の藤井氏に依れば、海拉爾附近は毎年五月十日頃になり雪は漸くとけ、土地の利用はこゝに始まり、播種など約一ヶ月間は農家は多忙である、主に小麥を栽培するもので、一町步約二四〇布度の收穫を得る、一布度は約一圓に當るから一町步の收穫は二四〇圓と云ふことになる、然し收量の少い處にありては一町步三十布度乃至六十布度程度の處もある、先年海拉爾川支流のオイナ河畔で某

氏が約四百町歩の農耕を經營したが、遺憾ながら失敗に歸したのである、然し之は排作に適しないためではなくして勞働者として滿洲人を使用したためであつたことである。尙土地の利用には從來は自由移民に對しては恩典はなかつたのであつたが、今は滿洲農業團隊中央會が出來、信用組合も出來、組合員には各地の農業團隊で援助を受けることも出来るやうになつてゐるから、農耕は必ずしも不適ではないのであるが、現今の處では利用は右の狀況であるから、未だ充分であるとは考へられない。小麥の如きは本地方に於ては年約四〇〇萬布度の需要があるのであるが、實際本地方の産額は未だ二〇〇萬布度程度に過ぎないから小麥粒一五〇萬布度、小麥粉五〇萬布度は之を輸入にあはいでゐる有様であり、將來大に利用の道を講ずる餘地がある。

(ロ) 牧 畜 業

次に本地方の牧畜業の現況を觀るに、本地方に於ける家畜は牛・馬・騾・羊・山羊並に豚等で、其の飼養數は左の通りとなつてゐる。(齊々哈爾鐵路局管内)
(産業ノ現在及將來)

家 畜 飼 養 數 (昭和十一年)

	牛	馬	騾	羊	山羊	豚
龍 江 省	九四、二七	三六、六八	三九、九四〇	一三、二六五	四二、九英	
興 安 東 省	六、七元	七、三三	一、八八	四七	六、八四元	
興 安 西 省	二〇、九四	六、七元	九、〇	二九、七五	四、七五元	

大興安嶺兩側地方の經濟地理的觀察

興安北省	一四、八〇〇	二三、〇五五	—	八二、三三七	五八一
興安南省	九、七五七	三、八八八	四、一〇〇	八三、〇六八	六、四六〇

之を土地面積に比較して見ると、一千陌當り家畜頭數は左の如くなる。

	土地面積(千陌)	牛	馬	騾	羊	山羊	豚
龍江省	一一、五五三	九・四	二七・六	三・五	四・八	二五・〇	
興安東省	一〇、六七八	〇・九	〇・八	—	〇・一	—	—
興安西省	六、四二八	一四・九	三・七	—	一八・九	—	—
興安北省	一六、〇三九	七・〇	七・四	—	四三・六	—	—
興安南省	七、二三七	八・四	一・九	—	一二・七	—	—
平均		八・一	九・三	—	一六・二	—	—

次に現今飼養せる家畜數の家畜總數に對する割合を觀ると、龍江省に於ては(龍江省産業要覽(康德二年度頁一五)家畜總數は九六九、六〇九頭、家畜八二一、四一七羽で、其の割合は左の如くなつてゐる。

豚	四六・〇%	牛	七・三%	馬	三二・六%
騾	四・九%	羊	四・九%	騾	四・一%
鶏	八三・六%	鴨	一三・八%	鶩	二・五%

これに依つて見ると、龍江省地方では豚以外には馬が最多く、緬羊、牛、騾、騾の如きは極めて少く、役畜として畜牛・騾・騾を合算しても尙馬匹數の二分の一にしか當てゐない、是本地方は運輸機關及農耕役畜としての馬

匹が重要なためであるが、興安四省では反て豚や馬は減少して羊が最多く、牛之に次である。(龍江省産業要覽頁一六) 更に用途別に見ると、平均比率は一農家當の役畜は二・一頭、用畜は二・〇頭、家禽は三・一羽、之を管内一農家當耕作面積に比べると、更に用畜及家禽の増殖を必要とするのみでなく、農民生活の向上に作ふ自然増耕の趨勢にある現今特にこの増殖は必要なことであると考へられると云ふてゐる。(龍江省産業要覽頁一六) して見るとこの地方の家畜の利用も尙將來を待たねばならぬ。

然し滿洲の方では産業五ヶ年計畫なども考へられ既に實施に入り、鐵路局の方でも沿線地域に之を實施し着々成果を擧げつゝある状態であり、畜産に關しては先づ沿線は草原である關係上、之を利用して牧草資源の培養を計り、牧草中ルーサンを選びて、之が種子を配付し栽培指導をなして居り、昭和十一年には一、四四五疋の種子を配布し、七三二町歩に播種せしめたと云はれてゐる。(齊々哈爾鐵路局産業ノ現在及將來)

又沿線地に種畜を貸付、之を獎勵してゐる、種畜貸付頭數を觀ると左の通になつてゐる。

	性	昭和八年	九年	十年	十一年
綿 羊 (メリノ種)	牡	二五	一〇	四八	一四二
同 (改良種)	同	二四	二一	一〇二	一
同 (在來種)	牝	一、四九五	四三〇	二、二七七	二、六二〇
豚 (パークシヤ種)	牝	一	一〇九	一九五	八九
牛 (乳牛)	牝	一	一	三〇	一

同	(ホルスタイン種)	牝	1	1	1
同	(同)	牝	1	1	1
同	(短角種)	牝	1	1	1
同	(在來種)	牝	1	1	1
					一二〇

尙之が獎勵の成果を擧ぐるため、各種の施設が施されてゐる。即ち濱洲線では

富拉爾基酸乳製造所、富拉爾基に置き、馬及乳牛を飼養し、馬乳、牛乳を以て、特殊酸乳を製し、結核治療に供する他、畜産改良獎勵機關として利用してゐる昭和十年に北鐵から接收した機關である。

札幌木得緬羊改良場、滿洲國蒙政部の管理する處で、昭和十年に開設せられた。

海拉爾種馬場、海拉爾にあり、昭和九年の開設で滿洲國軍政部馬政局の管理である。

海拉爾洗毛廠、海拉爾に在り、鐵路局の經營。

平齊線地方では

白城子種畜場、白城子に在り、昭和九年の開設で、メリノ種並改良種緬羊及パークシヤ種豚の蕃殖育成、配貸付、飼育指導をなす機關で、鐵路局の管理である。

押木營子牛馬試驗場、昭和九年の開設で、公主嶺農事試驗場の分場で、畜業部の管理に屬し、平齊線より分岐する白溫線玉爺廟北方に位す、馬匹及畜牛の改良試験を行ふ。

王爺廟綿羊改良場、白溫線王爺廟に在り、昭和十年の開設で、各種綿羊の蕃殖育成機關であり、滿洲國蒙政部の管理である。

此等の基礎的機關が設置せられ、所謂産業上の計畫が實施せられてゐるのであるが、其の他に、或は畜産の品評會を開催して之が獎勵に資するとか、或は貸付種畜、獸疫豫防注射施行、畜産講習會の開催、種畜場視察團の實施、綿羊組合、酪農組合の助成、生産物の加工獎勵及販賣斡旋等をも行つて産業の開發に熱中してゐるのである。

(八) 商工業及鑛業

次に商工業に對する施設狀況を觀るに、産業資源上から別つと、本地域は齊北・平齊沿線は農業地域、濱洲沿線・興安嶺地域は林産地域、海拉爾を中心とする呼倫貝爾は畜産地域となることは既述の通りであるが、殊に齊北沿線地は北滿の穀倉と稱せられ、尙幾多の未墾地もあり、開拓者の來住を待つてゐる状態ではあるが、その產出する農產品は今の處品質尙低劣の嫌があり、商業上から觀察する時大に注意すべき點だと考へられて居り、呼倫貝爾の羊毛資源の如きも、海拉爾に集散し、滿洲第一の羊毛產地をなしてはゐるが、其の羊毛たる概して品質に於て劣り、何等規格統一もなければ、検査制度もないので、商工業上から觀れば、將來大に研究を要する域を脱してゐないことになる。かく本地方の產品は商工業上より觀れば尙改良の急務たるを感ずるものであるが、然しこの滿洲に於ける特產品は牧畜業家農業家にとつては其の生活決定標準となるものであり、其地方經濟の中心

となるものであるから、この特産品産出の消長は商業上には最重要な關係を有する、例へば滿洲に於ける先年の水災・匪禍のため農家は窮迫に陥り、又特産物上に於ける慘狀、殊に農産物中の主なる大豆の捌口狭小となつたため農民は疲弊の極に達し、購賣力減少し、本地方の商業は不況に陥たのである。然るに昭和十年度に於ては大豆の需要増大、殊に滿獨通商協定の成立により特産相場の昂騰を來し、結果商況は好轉したと報ぜられてゐるやうである。然れば、林産・畜産・資源の開發に伴ひ、將來商業の發達も豫測することが出來ると考へられて居り、又邦商の方も事變後排日空氣がなくなり、奥地への交通も便利になり、又討匪により治安も恢復し邦人も激増したので、各主要都市並に新線建設地方に躍進して事業を擴張するやうになつたと云はれてゐる。

(齊々哈爾鐵路局管内産業)
(現在々將來頁二二—二三)

次に工業方面を觀るに、本地方は農・畜・林産の資源に富むでゐるが、工業に重要な燃料並に用水の缺乏と住民が稀薄である爲に工業の發達を阻害することが多い。農産物を原料とする製粉・製油・亞麻工業等は各所に行はれてゐるが未だ地方的の性質を脱してゐない、其の他には窒素・獸毛加工・製材・燐寸・製紙・石鹼等の工業もあるが何れも小規模であると云はれてゐる。

次に鑛業を觀るに、之は既に述べた如く滿洲里附近の札賚諾爾の炭礦があるに止まるが、これとても褐炭であつて風化し易く現今地方では唯一の燃料として使用はしてゐるが、差したるものとは考へられない。

本地方に於ける資源利用の現状を諸報告書によりて觀察すると右のやうであり、未だ充分の利用に到達してゐる

ない。將來益利用すべき所なることを示してゐる。

五 經濟資源利用の將來

然らば本地方の將來は如何であらうか、「齊々哈爾鐵路局産業の現在及將來」には本地方の將來に對して左の如く考察してゐる。本地の大部分を占めてゐる平齊線沿線並に齊北線沿線の後背地は總面積に對し、平齊線地方は四六%齊北線地方は八五%の未墾地を有して居り、農業地として將來に向て有望なることを示してゐるもので、殊に齊北線地方の如きは土地も肥え有望である。然し本地方の農業は之を南滿州地方の農業に比べたならば素より不利な自然的條件下にあることは事實である、夫にも拘はらず、殊に現今農村經濟の逼迫せる時代に於て、然も半開化的な粗放的農業法によつて、一、九一五、七八〇陌を耕作して、二、〇二二、四六疋の生産を出してゐると云はれ、尙前年度と對比した統計を觀ると（齊々哈爾鐵路局産業ノ現在及將來）昭和十一年度に於ては耕作面積は昭和十年度に比し、一〇〇、九六三陌、生産高は一四、七三七疋の増加を示してゐる、然し耕作面積の増加に對する生産高のこの増加は寧ろ寡少である。

平齊沿線後背地

	昭和十一年	昭和十年	増減
作付面積	一、〇六二、四四七陌	一、〇一〇、〇三一陌	(+) 五二、四二六陌
普通作物	九八三、一五八	九三〇、七三七	(+) 五二、四二一

大興安嶺兩側地方の經濟地理的觀察

第十四卷 第一號

工園藝作物

七九、二八九

七九、二九四

(七八) 七八

生産高

一、〇六八、〇六五町

九九六、三九三町

(一) 五
(十) 七一八、六七二町

齊北沿線後背地

昭和十一年

昭和十年

増 減

作付面積

九四六、九二七陌

八九八、三八〇陌

(十) 四八、五四七陌

普通作物

八二四、二六五

七六二、二九三

(十) 五一、九七二

工園藝作物

一二二、六六二

一三六、〇八七

(一) 一三、四二五

生産高

九五四、四〇一町

一、〇一一、三三六町

(一) 五六、九三五町

蓋昭和十一年度に於ける旱害並に雨量多過の結果で、齊北沿線後背地の減収によるものと云はれてゐる。
(齊々哈爾鐵路管内産業ノ現在及將來頁四三) かく本地方は農業條件が不利であり、増加率はたとへ少いにせよ、漸次發達の傾向を辿つてゐることは充分に之を察せることが出来るのである。

將來に於ては如何に發展せしめ得るであろうか、この經濟資源を開發する爲に、將來に於ては本地方にも本邦人の農業移民が強調せられて居り、我が國の援護に依り滿洲全體で、本邦より二十ヶ年間に約百萬戸の農業移民が計畫實行されてゐると云ふことであり、其の中本地方は先づ十ヶ年間に於て約二十萬戸收容し得ると看做して大過はないと考へられて居り、(齊々哈爾鐵路局管内産業ノ現在及將來頁四三) 尙邦人以外に北滿地方の人間も約十萬戸位は農業移民政策の結果入植するであろうから、十ヶ年後には本地方の移民は約三十萬戸となるわけであり、現今本地方に於ける

一戸當耕作面積は四・六陌で、一陌當の平均收量は二・一五疔とすると、十ヶ年後には本地方の作付面積は昭和十一年の二、〇〇九、三七四陌、生産高二、二二二、四六六疔より昭和廿一年には作付面積三、三八九、三七四陌、生産高三、八九七、七八〇疔となり、結局作付面積に於て一、三八〇、〇〇〇陌（六九％）、生産高に於て一、七七五、三一一四疔（八四％）の増加となる理であるが、尙總面積に對して所謂ベージン、ソイルは六、一六三、五五二陌（五五％）を残して居ることとなるのであるから、この地方の開発は前途遼遠であり、將來有望であることを察せしめるのである。（齊々哈爾鐵路局管内產業ノ現在及將來頁四六）

次に本地方の畜産の將來に就ては次の如く豫想されてゐる、即ち滿洲國第一次產業五ヶ年計畫は幸にも差程の障礙もなく、略豫期の成果を得たので、引つゞき第二次五ヶ年計畫も着手され、畜産に於ては其の性質上第一次第二次期間に於ては基礎的工作（改良種畜の配給機構及指導機關の整備、獸疫等對策等）に全力を集注することになり、從て農産に比べると、其の増殖に於て多少不發達の感を免れなかつたのであるが、基礎的工作は略完成に近き迄に進捗したので、第二次計畫完了の昭和廿一年（康德十三年）頃に於ては政治經濟兩方面に於ける外的環境の有利な展開と第二次五ヶ年計畫の飛躍とによつて、海拉爾市場を中心とする濱州線地方は本地方のみでなく、全滿洲に於ける畜産の中樞となるであろうと考へられ、其の施設に於ても康德八年設立の滿洲國立畜産試驗場呼倫貝爾支場（海拉爾）は畜産に關する試験、特に緬羊・馬匹・畜牛の改良試験を主とし、又酪農・牧野の改良等に關する試験を行ふやうになり、康德二年設立の濱洲煉乳株式會社（昂々溪）は煉乳製造以外にも活動し、三河地方に

も工場を置くこととなり、康德十年の設立で、滿鐵の經營たる哈爾濱獸肉加工所齊々哈爾工場は各種獸肉の加工、罐詰等を行ひ、康德二年の設立、滿鐵鐵路局の經營たる海拉爾洗毛廠は大擴張を行ひ、呼倫貝爾羊毛の洗毛並にプレス等をなす外、外蒙の開放により其の機能を擴大することとなり、康德六年の設立、滿鐵の經營たる模範牧場（濱洲線哈克）は乳牛・綿羊を主とせる牧場なるが、進で經營の指針を示すと共に、尙業者の進出を誘導することとなり、又康德五年の設立で、沿線酪農業者の組織する海拉爾酪農組合聯合會では酪農工場を經營し、バター・チーズを製し、又組合の金融を司ることとなるであろう、かく畜産機構が具備すると共に農産方面に於ても北黑線方面に於ける集團農民や平齊・濱洲兩線の自由農民の増加により、未耕地の約五十%は開發せられ、又蒙地に於ける蒙政部の計畫の結果蒙人の土着農牧に従事する者を増し、其の結果特産品の出廻りも増大するであろうし、又小麥・馬鈴薯の産額が増加し齊々哈爾に於ける製粉並に酒精工場等が發達するであろう、又輸送方面に於ても鐵道新線の開通と外蒙の開放とにより、夫等方面から海拉爾にも出廻る綿羊・牛・馬等の生畜類を始め、羊毛・毛皮・皮革類の數量が増加し、洗毛廠で取扱ふ羊毛のみでも四千疋に達し、殊に其の四〇%は改良毛で、殆ど日本内地に仕向らるゝ状態になるであろう、從て海拉爾の市場の如きは實に極東に於ける畜産集散地として世界的に發達し得るであろうと考へられてゐる。

（齊々哈爾鐵路局管内
産業ノ現在及將來）

尙林業に就ては本地方は一帯の草原で一本の樹木すらないのであるから、樹林の本地方に於て必要な事は申すまでもないことである、鐵路局の方でも自給自足の立場より直接間接に植樹造林を獎勵して居り、微細な事ので

うではあるが、一望千里の草原を旅行する旅客の旅愁を慰むるため、且は従業員の保健・衛生上の一助として各站到緑蔭用觀賞用各種樹木花草を植栽せしめてゐる、此等は自分の汽車旅行中目撃した處である。又鐵道附近にある愛護村、自警村等に對しては各種農業施設と伴つて耕地防風林、薪炭林の造成を目的として年々多量の樹苗を無償配付してゐる、昭和九年以降三ヶ年程の間にドロノキ・カラマツ・ヤナギ等五十二萬本餘を配付し、住民に植樹の効果を知らしめてゐるが、成績は良好であり、住民の植樹觀念は盛になりつゝありと云はれてゐる。

(齊々哈爾鐵路局管內產 業ノ現在及將來頁二九) 又從來は本地方の農民は薪炭材を造成せんとの考がなく「ないから仕方がない」と云ふ滿洲一流の考で居たのであるが、如何な滿洲の農民でも薪の豆殻より燃料として優良なる程度の事は知てゐるのであるから、この薪の優良性を利用して奨勵したならば、農村に於ける薪炭林造成は比較的簡単に實現し得るものと考へられて居り、又防風林の如きも嚴密な施業法の實施は現今の滿洲内農村の實情から見て困難と考へられるが、比較的自由な施業を營み得る薪炭林を兼ねた防風林の造成ならば意外に成功し得るであろうと考へられてゐる。(齊々哈爾鐵路局管內產 業ノ現在及將來頁三〇) 尙鐵路當局では此等の各造林業上の施設のため、齊々哈爾を始め白城子・洮南・四平街等に苗圃を設け一ヶ年五十萬本内外の山出し樹苗の養成に努力して居り、興安嶺山脈地帶の國有地の貸付を受け、又所轄行政廳と共に共同してカラマツ・ドロノキ等有用樹の造林を行ひ、又民間土地所有者中の希望者を募て之と共同造林を實施に努力してゐるのである。(齊々哈爾鐵路局管內產 業ノ現在及將來頁三〇)

六 結

語

以上極く概要ではあるが、自分の視察により大興安嶺を中心とする東西兩側地方の地理的性質と經濟資源の如何なるものかを觀察し、更にこの地理的性質と經濟資源とを現今如何なる程度に利用してゐるかを觀察したのであるが、自分の視察によれば本地方は氣候が酷烈であり人間の生活上には困難が多いこと、並に農耕に於ても他の地方に比すると自然的制限を受けることが多く不利な條件にあると云ふことを知た、故に現今の處は尙住民も少く土地の利用も未だ充分に出來てゐない、自然の草原のまゝに放牧せられてゐる状態であるが、然し如何に自然的制限を受けるにせよ、又夫れ相當の利用の道はないのではない、農耕に於てはこの自然條件に適する小麥・大豆等の耕作も考へられ、殊に畜産に於ては反て適當で、牛・羊の如きも有望であり、殊に羊の如きは好適であると考へられ、鱈産に於ては調査不完全のためか、遺憾ながら著しきものを發見しないけれども、沼澤地に於て自然に露出する天然曹達の利用は本地方の特種天與として利用の要があり、林産の如きも現に蓄藏されある興安嶺の森林の利用を始め、造林の道を講ずるならば將來有望なる木材産地となることも考へられる、従て本地方は今日こそは未だ全く未開の原始曠野ではあるが、將來に於ては經濟上必ずしも棄つべき處でないことが察せられ、日滿提携の今日、邦人の移住地として將來この方面にも留意せば優に多數の移民を送り得べく、又農産に於ても小麥・大豆を始め益々之が利用を計り、殊に羊毛の如きは尤に之が改良を計り我が國羊毛經濟の資に供す

ることは最重要なることと考へられる、現に北滿羊毛の中心市場である海拉爾では緬羊殖産會を組織し之が開發に熱中してゐる、(海拉爾緬羊殖産會則 昭和十二年三月設立)而之に關係せる海拉爾洗毛廠の藤井魏氏によれば、本地方羊毛は現今の處尙品質劣等であり、日本に供給するの價値を有してゐないけれども一、三度も緬羊種をかけ合はせば優に改良の見込があると云ふことで、既に海拉爾緬羊殖産會十ヶ年計畫増殖表(昭和十二年三月三日 藤井洗毛廠主任立案)をも作製して居る程であるから、將來に於ては必ず有望なる供給地として發達するであらうと考へられる。然しかゝる土地の利用は之を土着の住民に委して置いたのでは到底達成し得べきでない、これは過言かも知れないけれども目撃する處によれば地方の住民は未だ未開であるから、是非とも邦人の出馬之を指導するに非れば相互に有利な開發は出來ないと考へられる、この點よりしても將來邦人の進で彼地に移住し指導以て資源の開發に當らねばならぬ、かくなればこの無限の荒地も自然に開發され相互に利を得るに至らん、早く日滿支の提携成り、此等開發の達成せられんことを望む次第である、然しこの開發は決して一朝一夕の業ではない、誠に長期建設である、吾人は宜しくこゝに留意萬難を排して之が建設に邁進すべく努力しなければならぬの感を深くする次第である。